０９／０３／０１　　礼拝メッセージ　　近藤修司　牧師

主　　題：救われた者への神の祝福６
聖書箇所：ローマ人への手紙　５章６－８節

　パウロはこれまで私たちに、私たち信仰者に与えられた神のすばらしい恵みがどれ程のものかを教え続けています。私たちクリスチャンはすばらしい神からの祝福をいただいた者だと言います。私たちは罪の赦しをいただき、神と自由に交わることができ、そして、永遠の希望をいただきました。パウロはこのように言いました。**「この希望は失望に終わることがありません。」**（ローマ５：５）と。私たちが信じ、私たちが持っているこの希望は、絶対に失望に終わらないのです。その約束をパウロはここで私たちに与えてくれるのです。しかもそれだけではなく、彼はその希望を失わない根拠を私たちに教えてくれています。後になって「私の信じていたこと、私の確信していたこと、それは間違っていた。」と、そのようなことになることは絶対にないとパウロは言います。そのように話した後、パウロはなぜそうなのか、その理由を教えようとします。それが今日、私たちが学ぼうとしているこの６節から記されています。パウロはこの６節から１１節の間に二つの理由を教えています。

☆希望が失望に終わらない根拠　　６－１１節

１．神の愛　　５b－８節

　なぜ、私たちの希望が失望に終わることがないのか、その理由の一つ目は、神があなたを愛しているからだと言います。神の愛についてパウロはこの５節の後半から８節までに教えています。そして、９節から１１節までは、神があなたのためにどんなにすばらしいことをしてくれたのか、神のなさったみわざがあなたの希望が失望に終わらないことの根拠であると言っています。神があなたや私をどんなに愛してくださっているのか、そのことをこの６節からパウロは教え続けるのです。まず、その箇所を読みましょう。**「:6 私たちがまだ弱かったとき、キリストは定められた時に、不敬虔な者のために死んでくださいました。:7 正しい人のためにでも死ぬ人はほとんどありません。情け深い人のためには、進んで死ぬ人があるいはいるでしょう。:8 しかし私たちがまだ罪人であったとき、キリストが私たちのために死んでくださったことにより、神は私たちに対するご自身の愛を明らかにしておられます。」**、神があなたを愛している、この神の愛は、私たちの愛とは異なっています。イエスがヨハネの福音書１５：１３でこのようなことを言われました。**「人がその友のためにいのちを捨てるという、これよりも大きな愛はだれも持っていません。」**。私たち人間が示せる一番大きな愛は、私たちの友のために、人のために自分のいのちを犠牲にすることであると言います。確かに、それは大きな愛です。しかし、私たち人間ができるのは、私たちの友のために、友に対してそのような犠牲を払うということです。そのことはパウロがこの後で教えていますが、可能かもしれません。でも、そこには条件があります。友だからです。その条件にかなっていなければ残念ながら愛を示すことはできないのです。

　パウロはここから私たちに神の愛がどのようなものか、どんなにすばらしいものか、そのことを教えるのです。残念ながら、今私たちが見ている新改訳聖書の５：６には、大切な接続詞が訳されていません。つまり、ここでは「というわけで」、「だから」、「その理由は」と訳せる接続詞が付いているのです。なぜ、パウロはそういうものをここに付けたのかと言うと、これから語ることに対して、パウロは自分自身が確証している事実を紹介したかったからです。これから彼が話すことは、彼自身が真実かどうか分かっていないようなことではないのです。彼自身が強く確信していたことです。これは疑いのない、間違いのない事実だと、そのような強い確信を持っていることを表わすために、敢えてここに最初に接続詞を使ったのです。ですから、この後見て行くときに私たちが教えられることは、パウロ自身が持っていた強い確信です。すでに、５節で**「この希望は失望に終わることがありません。」**と見ましたが、なぜ、パウロはそのように語ったのか、その理由を前回見ました。それは５節に記されていた通り、**「なぜなら、私たちに与えられた聖霊によって、神の愛が私たちの心に注がれているからです。」**、だから、「私の希望は絶対に失望に終わらない。」と言っているのです。聖霊なる神が「私は神に愛されている」というその確信を与えてくれると言うのです。そのことは前回私たちが見たことです。ですから、まず、パウロがしていることは、神からの祝福のその確実性、本当に神は祝福を与えてくれ、その祝福は絶対に失望に終わらないと、そのことを主観的に説明しているのです。つまり、これは彼自身の経験なのです。皆さんもイエス・キリストを信じたこと、その経験をされているでしょう。ある時は孤独かもしれない、ある時は問題を抱えているかもしれない、でも、いろいろな時に私たちは神が私を愛してくれている、神が私といっしょにいてくださっていると、そのように思って私たちは励まされています。それを周りの人にことばで説明しようとしても難しいときがあります。ことばでうまく言えないけれど、私のうちには確

信があるのです。「神が私とともにいてくださる。私を愛してくださっている神がいる。神は私のことを愛してくれている。」と。パウロが最初に言ったのはそのように主観的な説明なのです。自分自身が確信していること、彼自身が実際に体験したこと、そのことを彼はここで語るのです。

そして、６節以降を見たとき、彼はイエス・キリストの十字架という歴史的事実を用いて、神の祝福の確実性を今度は客観的に説明しようとしているのです。

◎神の祝福の確実性　―　客観的に　　６節～

１）**神の救いは神の一方的な行為である。**神が一方的に罪人を救おうとしてくれると言います。

２）**救いは神の愛に基づいた行為である。**すべて神の愛に基づいていると言います。

３）**救いは人間にとって最も受けるに値しないものである。**私たち人間に救われる価値はない。神が備え与えてくださった救いは私たちに最も相応しくないものだと言います。

４）**救いは神の深遠なご計画に基づいた行為である。**つまり、この救いに関して、私たちはすべてを理解することは出来ないと言うのです。余りにも、神のご計画は深すぎて大きすぎて、私たちの理解の限界を超えてしまっているのです。

そのことをパウロは私たちに悟らせようとするのです。神が与えてくださった救いがどんなにすばらしいものか、そのことを悟らせようとするのです。そして、そのために、彼は私たちが神の救いの恵みを理解するために、私たちが神の目にどのように映っているのか、本当のあなたをあなた自身に悟らせようとするのです。人があなたをどう見ているかではないのです。創造主なる真の神があなたをどのようにご覧になっているのか、そのことにまず目を向けさせようとするのです。実は、このことが最も大切なのです。私たち信仰者は神の御顔を見て、神の目をしっかりと覚えて生きることが必要です。人は誤解します。人は理解してくれません。でも、神は正しく理解してくださいます。ですから、私たちが人が喜ばなくても神が喜んでくださることをして行けば、少なくとも、このいのちをくださった神は私たちを見て喜んでくださるはずです。そのためにも、しっかりと神の目を覚えることが必要です。

◎私たちは神の目にどのように映っているか？

パウロはそのことを６節から四つのことを教えています。これが神の目に映るあなたの姿です。

１）**霊的に弱い者　　６節**

６節に**「私たちがまだ弱かったとき、」**とあります。この「弱い」存在、これがあなただと言うのです。これは肉体的に弱いというのではなく、ここで言われているのは霊的なことです。実は、あなたは霊的に弱い者だとパウロは言うのです。つまり、力がない、非常に無力な存在だと言っているのです。何においてそうなのでしょう？それは悲しいことに、あなたは無力だから神の前に正しいことができないのです。あなたは弱いから神が喜んでくださることを行なうことができないのです。霊的に弱いから神が望んでおられる人になることができないのです。また、私たちが弱いゆえに、自分の罪がもたらす永遠のさばきから自分の力では逃れることができないのです。それほど私たちは弱いのです。また、自分自身をとりこにしている罪の力から逃れることもできません。自分で自分を変えることも、まして、救いを自分の力で自分の努力で行ないで得ることなど不可能なのです。なぜなら、私たちは霊的に弱いからです。皆さん、どうでしょう？何度も正しい者になろう、神が喜んでくださる者になろうと決心しても、私たちは残念ながら、神が喜んでくださるような人物にはなれません。まして、イエス・キリストを信じる前の私たちは最悪でした。私たちがしたことは、周りの人たちと自分を比較して、このような人たちより自分はましだ、彼らよりも良いことをしていると、そのようなことに自分自身の慰めを見つけていました。ところが、神の目を通して自分を見た時に、神がどのように私を見ておられるのか、それを知った時に、自分は神の前に喜ばれることなど全くできない者、神が望んでおられるような生活が全くできない者、神の前に正しいことができない者であると分かるのです。私たちがして来たことは、この後にも出て来ますが、全くそれと相反する生き方です。私たちは強いと言っていても、自分の力ではどうすることも出来なかったのです。このように神の前に弱い者なのです。

イエス・キリストを信じた後も、私たちは同じような経験をしています。イエス・キリストを信じた私たちはこの罪との戦いを継続しています。「なんと私は弱いのだろう、なんと私は愚かなのだろう。」と、そのようなことを度々思っていませんか？イエス・キリストを信じたなら完全に罪から離れることが出来るだろうと思っていたら、罪との戦いは毎日続いています。パウロが言ったように**「私は、ほんとうにみじめな人間です。」**（ローマ７：２４）と、まさにその通りです。パウロがまず教える私たちの本当の姿は、私たちは生まれながらに霊的に弱い者であり、そして、現実にイエスを信じた後の私たちも常に神の助けが必要な弱い者だということです。

２）**不敬虔な者　　６節**

同じ６節に**「不敬虔な者のために死んでくださいました。」**とあります。この「不敬虔」ということばは「神を崇拝する」ということばの否定です。新約聖書の中に９回出て来ます。Ｉペテロ４：１８には**「義**

人がかろうじて救われるのだとしたら、神を敬わない者や罪人たちは、いったいどうなるのでしょう。」と「**神を敬わない者」**と記されています。そして、すでに私たちが学んだローマ４：５では**「…不敬虔な者を義と認めてくださる方を信じるなら、」**と、ここと同じように**「不敬虔」**と訳されています。つまり、私たちはみな神に逆らい、罪を犯し続けている者だとパウロは私たちに教えるのです。不信心です。神を敬おうとしない、神を敬って謹もうとしない、神に対して謹み仕えようとしない、いつまで経っても神を神として崇めないのです。私たちは非常に高慢な者です。神が言われたことに対して、それをそのままに受け入れるのではなくて、私たちの判断がその神の教えよりも優先されるのです。

すでに私たちは４章でアブラハムの信仰を見ました。あのように信仰の父と言われたアブラハムでさえも、残念ながら不敬虔でした。神が言われたことをそのまま正しく受け入れて、それに従い続けて行くことが出来たのでしょうか？そうでなかったということを私たちは見て来ました。アブラハムには神からの約束が与えられました。それはあなたの子孫にこの地を与えるという約束でした。そして、アブラハムはその約束を信じて、今のイスラエルへと向かって旅をするのです。ところが、シェケムに着いた時に、アブラハムはネゲブの方へと旅を続けようとするのですが、そこに見たのは「ききん」でした。そこで彼はそのとき、神の約束信じて従い続けるのではなくて、自分で判断してエジプトに移動しようとしました。その際、彼は自分の妻に「妹であると言ってくれ」と言います。皆さんよくご存じのところです。そうして神の言われていること、神が約束されたそのおことばを信頼続けようとしなかったのです。同時に、彼が９９歳の時、神があなたたちに子どもが生まれると言われたその約束を信じ切ることができませんでした。あの信仰の父アブラハムでもそうでした。私たちの問題はそこにあります。確かに、パウロが言ったように**「義人はいない。ひとりもいない。」**、**「善を行う人はいない。ひとりもいない。」**、**「すべての人は、罪を犯したので、…」**とまさにその通りです。

この中で「私は常に神の前を正しく歩んでいる。私は常に神のおことばに従い続けている。私はすべてにおいて神が喜んでくださることを行ない続けている。」と、そのように言える人はいますか？もし、いたとするなら、あなたは一番の罪人です。私たちは自分を見る時に、パウロが言ったように「私は神に喜ばれたい、しかし、私は自分のしていることが分からない。」と言うのです。ローマ７：１５**「私には、自分のしていることがわかりません。私は自分がしたいと思うことをしているのではなく、自分が憎むことを行なっているからです。」**、１７－１９節**「ですから、それを行なっているのは、もはや私ではなく、私のうちに住みついている罪なのです。:18 私は、私のうち、すなわち、私の肉のうちに善が住んでいないのを知っています。私には善をしたいという願いがいつもあるのに、それを実行することがないからです。:19 私は、自分でしたいと思う善を行なわないで、かえって、したくない悪を行なっています。」**、これが私たちの姿でしょう。神の前に正しく生きたいとどんなに強く願っていても、悲しいことに、神の前に罪に罪を重ねている私たちです。本当の自分に気付いた時に、パウロが言うように私たちは神の前に不敬虔な者だと、そのことに気付いた時に、私たちはパウロと同じように「私は本当に、本当にみじめな人間だ」と、そのように神の前に告白するのではありませんか。

私たちは生まれながらに神を心から崇めないだけでありません。イエスを信じた後も私たちは心から神を崇めているのかというと問題があります。パウロはエペソ人への手紙２：３で**「私たちもみな、かつては不従順の子らの中にあって、自分の肉の欲の中に生き、肉と心の望むままを行ない、ほかの人たちと同じように、生まれながら御怒りを受けるべき子らでした。」**と言っています。私たちは生まれながらに創造主なる神に従って生きるのではなく、自分の肉のままに自分の好きなように生きようとしている。だから、例外なく、すべての人は神の怒りを受けるべき者だと言います。「神さま、その通りです、私は確実にその中にいるし、そして、私はその中で最も罪深い者です。」と、あなたはそのことをご存じですか？

３）罪人　　８節

三つ目に、私たちは罪人であると言います。８節**「しかし私たちがまだ罪人であったとき、…」**、生まれながらの私たちは神を憎み、神に対して反抗的であったと言うのです。なぜなら、神がこのように生きなさいという生き方に真っ向から反対したからです。「そのような生き方は私はしたくありません。私は自分の好きなように生きて行きます」と。だから、私たちは神を憎み反抗的だったのです。でも、先ほども見たように、本当の自分の罪深さに気付いた者たちを神はあわれみ、そのような者たちを神は祝してくださるのです。皆さん、神がお用いになった人、神があわれみを示された人、神が大いに祝された人たちはどのような人たちだったのでしょう？自分の罪深さに気付いている人です。自分がどれ程罪深いかを知っている人たちです。例えば、あのシモン・ペテロはイエスの足下にひれ伏してこのようなことを言っています。ルカ５：８**「主よ。私のような者から離れてください。私は、罪深い人間ですから。」**と。人から教えられる必要はなかったのです。彼は自分を見た時に自分の罪深さを告白するのです。また、二人の者が主を礼拝するために宮に上がった様子がルカの福音書１８章に出て来ます。彼らは祈るために宮に上ったのです。その二人はパリサイ人と取税人です。取税人の祈りはこのような祈りでした。ル

カ１８：１３**「ところが、取税人は遠く離れて立ち、目を天に向けようともせず、自分の胸をたたいて言った。『神さま。こんな罪人の私をあわれんでください。』**、神はこの取税人を大いに喜ばれ、その祈りを聞かれました。取税人の罪を赦されたのです。なぜなら、彼は自分が罪深いことを知っていたからです。

また同時に、パウロは自分自身のことに関してこのように言っています。Ｉテモテ１：１５**「キリスト・イエスは、罪人を救うためにこの世に来られた。」ということばは、まことであり、そのまま受け入れるに値するものです。私はその罪人のかしらです。」**と。罪人の中でも最も罪深い者はだれか？「それは私だ。」と言うのです。神ののろいを一番に受けなければならないのはだれか？「それは私だ。」、地獄のその最も熱い所で苦しみを受けなければならないのはだれか？「それは私だ。」と。私のように罪深い存在は他にはいないと言うのです。自分を正しく見た人たちが気付くことは自分の罪深さです。そして、パウロが教えていることは、あなたが気付いているかいないかに関係なく、神は本当のあなたを見ておられるということです。本当のあなたをご覧になっている神はあなたに対して「あなたは罪深い、あなたはわたしに逆らっている」と、そのように言われるとパウロは告白するのです。

４）神の敵であった　　１０節

もう一つ、１０節**「もし敵であった私たちが、」、**神の目に映っている私たちの姿、その四つ目は「敵」であると言うのです。「私は神の前に悪いことはしていません。神を喜ばせようと一生懸命頑張っています。そんなひどいこともしてないし、法に反することもしていません。」とどのように言っても、神が言われること、それは「あなたはわたしの敵だ」ということです。なぜ敵なのでしょう？それは神の敵であるサタンを信じ、サタンに従っているのが私たちだからです。生まれながらに例外なくすべての人々が主人としているのはサタンです。サタンは神の敵です。その敵を喜ばせることを私たちは選択し、その敵の意のままに生きて来ました。だから、神は生まれながらの私たちに対して「あなたはわたしの敵だ」と言われるのです。

今、私たちは四つのことを見て来ました。だから、私たちがしっかりと覚えておきたいことは、人があなたのことをどう言うかではないのです。自分自身が自分のことをどう見るかでもないのです。私たちにいのちを与えてくれた方、私たちが必ず立たなければいけない場で私たちをさばくさばき主があなたに対して言われていること、それは「これがあなたの姿だ。弱く、不敬虔で、罪深く、敵である。それがあなただ。」です。

では、そのようなあなたを神はどのように扱おうとしておられるのでしょう？そのようなあなたに神はどのような思いを抱いておられるのでしょう？そのことをパウロは教えたいのです。神はそのような私たちを愛してくれたと言います。私たちは先ほど、ヨハネ１５章のみことばを見ました。１３節**「人がその友のためにいのちを捨てるという、これよりも大きな愛はだれも持っていません。」**、そのときに話した通り、私たちは私たちの友である人たちのためにいのちを捨てることは、もしかすると出来るかもしれません。ローマ５：７を見るとパウロは面白いことをここで教えています。**「正しい人のためにでも死ぬ人はほとんどありません。情け深い人のためには、進んで死ぬ人があるいはいるでしょう。」**、お気付きになりましたか？**「正しい人」**と**「情け深い人」**と記されています。どのような人たちでしょう？**「正しい人」**とは、正しく生きている人、人々から尊敬を博している人です。「あの人は立派だ」と言われる人たちです。パウロは、そのような人のためにもしかすると喜んでいのちを犠牲にしましょうという人はいるかもしれない、でも、正しい人よりも情け深い人にはその数はもっと増えるでしょうと言うのです。**「情け深い人」**とは、その人が情け深いゆえに人々がその人のことを心から愛している、そのような人です。正しいから尊敬していると言う人と、情け深いゆえに人々がその人を心から愛している人、そのように本当に心から愛する人のためなら、もう少し多くの人が喜んでいのちを捨てましょうと言う、その可能性があると言うのです。でも、７節でパウロが教えたかったことは、人が自分のいのちを喜んで犠牲にしようと言うのは、その人が正しいからであり、その人が情け深いからです。先ほど見たように、ヨハネ１５：１３にあるように自分の友だからです。では、その相手が自分に逆らう者だったらどうでしょう？自分の敵ならどうでしょう？そのようなことは可能かと問うのです。私たちには到底出来ないことだと分かります。でも、パウロは「それが神の愛なのだ。そのような愛であなたは愛されているのだ。」と言っているのです。

神の愛、それは何よって証明されるでしょう？イエス・キリストの死です。あの十字架です。

◎神の愛の特異性

神の愛が私たち人間の愛と違うところは何でしょう？今見て来たことから明らかなこと、それは私たちが実践できない愛であるということです。この神の愛の特異性をパウロは教えています。

１）神の計画に基づいている

イエス・キリストの十字架は神の計画に基づいたものであると言うのです。６節に**「私たちがまだ弱かったとき、キリストは定められた時に、不敬虔な者のために死んでくださいました。」**とあります。ここに**「定**

められた時に」と言っています。ある神学者は、これは「相応しい時に」と言います。私たち人間が自分ではどうすることも出来ない時、その時に神が為してさったから、「相応しい時、適している時」であると。人が救いを必要としている時に救い主が来てくれた、だから、相応しい時、一番適した時に来られた、そういう意味を持ってパウロはここで話していると言う人もいます。また、ある人たちは、神のご計画、定められた時であると言います。どちらも似通ったことなので、私たちがこのみことばからしっかり覚えるべきことは次のことです。イエス・キリストの誕生は偶然ではなかった、イエス・キリストの誕生、そして、イエス・キリストの十字架、そのすべては神があなたを愛していることの証拠だということです。ガラテヤ４：４を見てください。**「しかし定めの時が来たので、神はご自分の御子を遣わし、この方を、女から生まれた者、また律法の下にある者となさいました。」**、**「定めの時が来たので、神はご自分の御子」**イエス・キリストをこの世に遣わした、すべて神のご計画だということを言っているのです。また、エペソ１：９－１０には**「みこころの奥義を私たちに知らせてくださいました。それは、神が御子においてあらかじめお立てになったご計画によることであって、:10 時がついに満ちて、この時のためのみこころが実行に移され、天にあるものも地にあるものも、いっさいのものが、キリストにあって一つに集められることなのです。このキリストにあって、」**とあります。御子がこの世にお見えになったこと、それはすべて神が**「あらかじめお立てになったご計画によること」**と言います。また、ペテロはＩペテロ１：２０でこのように言っています。**「キリストは、世の始まる前から知られていましたが、この終わりの時に、あなたがたのために、現われてくださいました。」**と、イエス・キリストがこの世にお見えになった、それは世が始まる前から神が定めておられたことであると言うのです。イエス・キリストの誕生、先ほども言った通り、これは偶然ではありませんでした。神のご計画に基づいたものでした。

旧約聖書のダニエル書９章には、このイエス・キリスト、救世主に関する預言が記されています。ダニエル９：２５**「それゆえ、知れ。悟れ。引き揚げてエルサレムを再建せよ、との命令が出てから、油そそがれた者、君主の来るまでが七週。また六十二週の間、その苦しみの時代に再び広場とほりが建て直される。」**、いつ、救世主が来られるのかという預言です。ここを見た時に**「エルサレムを再建せよ」**という命令が出てから、**「君主が来るまで」**、すなわち、この救世主が来るまでの間どれ位なのでしょう？残念ながら、この新改訳聖書では**「…来るまでが七週。また六十二週の間、」**とこのように区切られています。でも、原文ではこのような区切りはありません。ここは「そして」という接続詞でつながれているのです。ですから、「君主が来るまでが七週、そして、六十二週の間」となります。句読点で区切ると誤解をもたらすことになり、また、難解になってしまいます。この箇所で言いたいことが良く見えないのです。口語訳聖書ではこのように訳されています。「それゆえ、エルサレムを建て直せという命令が出てから、メシヤなるひとりの君が来るまで七週と六十二週あることを知り、かつ悟りなさい。」と。こちらの方がより分かり易いです。こちらの方が原文に近い訳をしています。ですから、こういうことです。エルサレムを再建しなさいという命令が出てからメシヤが来られるまで六十九週あるということがここで教えられているのです。そして、この一週間というのは七年を意味するということで、このエルサレムを再建せよという命令が出てからメシヤが来るまでは４８３年と預言されたのです。

この預言に関して、イギリスの神学者のロバート・アンダーソンは自分の著書「来るべき君」という本の中でこのような説明をしています。「エルサレムを再建せよという命令が出て、そして、このメシヤが来られるまで、確かに４８３年だ。」と。メシヤが来るという預言ですが、これはメシヤが生まれるということではありません。メシヤが公にご自身を明らかにする時のことです。それは、イエス・キリストが受難週を迎えた時、十字架にかかるその週の日曜日にイエスはろばの子に乗ってエルサレムに入城されたその時です。その時に旧約聖書のメシヤに関する預言が成就したのです。救世主はそのようにしてやって来られるということ、それが成就したのです。このダニエル書９：２５で約束している「六十九週目」と言うのは、まさにイエス・キリストがろばの子に乗ってエルサレムに入城したその時であろうというわけです。このように預言されていた通りに、エルサレム入城が起こったのです。私たちが先ず、しっかり覚えておくべきことは、イエス・キリストの誕生はすべてのものをお造りになった神のご計画に基づいたものであるということです。神がなさることに誤りはありません。神は約束されたことをその通りに実行なさるお方です。ですから、このローマ５：６で、私たち自身が経験したことがないこと、また、私たちが実践することができないこの神の愛、それはすべて神のご計画に基づいたものであること、キリストがこの世にお生まれになること、キリストのあの十字架のすべては神のご計画であったと教えているのです。

２）罪人の身代わりである

二つ目に彼が教えていることは、このイエス・キリストの十字架は罪人の身代わりであるということです。罪人の身代わりのためにイエス・キリストはご自分のいのちを捨ててくださったのです。そのことはイエスがこの地上におられた時に、繰り返して人々にお話なったことでした。マタイの福音書９：

１３**「わたしは正しい人を招くためではなく、罪人を招くために来たのです。」**、マルコの福音書２：１７**「イエスはこれを聞いて、彼らにこう言われた。「医者を必要とするのは丈夫な者ではなく、病人です。わたしは正しい人を招くためではなく、罪人を招くために来たのです。」**と言われています。イエス・キリストがこの世に来られ、イエス・キリストがあの十字架にかかって死なれたのは、罪人のためである、私たちのためだと言うのです。神に逆らい続けてきた私たち、そのような私たちのためにイエス・キリストはご自分のいのちを捨ててくださったのです。ですから、この５：６に**「不敬虔な者のために死んでくださいました。」**、８節にも**「しかし私たちがまだ罪人であったとき、キリストが私たちのために死んでくださったことにより、」**と記されています。パウロが言わんとしていることは、これほど大変な罪人として神の前に映っている私たちがこんなにすばらしい愛を神から受けているということです。神はあなたのことを知らないで、後であなたの本当の姿が見えたときに「このような人物だったら愛さなかった、こんな人物とは知らなかった」などと言われません。神はあなたの本当の姿を知った上であなたを愛してくれたのです。そして、あなたのために喜んで身代わりとなって十字架で死んでくださったのです。そして、このすべては神の深いご計画に基づくことだとパウロは言っているのです。

最後にもう一つ、このイエス・キリストの十字架の行為は、８節の最後に**「神は私たちに対するご自身の愛を明らかにしておられます。」**と記されているように、私たちがどれ程神によって愛されているのかが明らかになると言うのです。この**「明らかに」**ということばは新約聖書に１６回出て来ることばです。「示す、立証する」という意味を持ったことばがここで使われているのです。Ⅱコリント４：２では**「恥ずべき隠された事を捨て、悪巧みに歩まず、神のことばを曲げず、真理を明らかにし、神の御前で自分自身をすべての人の良心に推薦しています。」**と、**「真理を明らかにし」**とあります。ですから、真理を明らかにする、人々の前に真理を伝えて行く、真理を知ってもらうようにそれを宣べ伝えて行くことです。ですから、このローマ５章でパウロは神の愛を人々に知ってもらおう、神の愛を明らかにして、神がどれ程あなたを愛しているのかを明らかにして行くのです。だから、十字架は神が私たち罪人をどれ程愛しておられるのかを明らかにする、その証拠である、それを私たちに立証するものであると言うのです。それ程難しくはないのですが、ここでは非常に面白いことばを使っています。この**「明らかにする」**ということば、これは「ともに、近くにいる」という意味を持ったことばと「置く」ということばが合成されているのです。そこで「ともに置く」とか、また、「何々から成り立つ」、「何々から出来ている」という、そういう意味を持ったことばなのです。確かに、「示す、立証する」という意味もあるのですが、同時に、このことばには「何々から成り立つ、何々から出来ている」という意味もあるのです。例えば、ルカの福音書９：３２には**「ペテロと仲間たちは、眠くてたまらなかったが、はっきり目がさめると、イエスの栄光と、イエスといっしょに立っているふたりの人を見た。」**と書かれています。山上の変貌というイエス・キリストの奇蹟です。イエスのみ姿が変わったことです。この箇所のどこにこのことばが出て来るのでしょう？**「イエスといっしょに立っている」**ということばです。それがローマ５：８に記されている**「明らかにしている」**と訳されていることばなのです。ということは、これはどういうことかと言うと、神は実は嫌だけれどしなければいけないからと無理矢理に愛したのではない、神は本当は愛したくないけれど、こんなにひどい罪人を愛そうと努力したというのではないということです。この８節で教えていることは「実は、これが主なる神だ」ということです。このようなご性質をもったお方なのです。私たちがどんなに罪深い者かということを神はしっかり知った上で、その私たちを愛するという、これが神だと言うのです。自分の性質と違うことをしようとしたのではありません。これが神のご性質、神ご自身なのです。神はこんなに罪深い私たち、罪人のかしらである私たちを愛そうとしてくださっているのです。これが聖書の教える神なのです。ですから、あの十字架を見た時に、私たちは神が私を愛してくださっていることを知るだけでないのです。十字架にかかられたお方は「愛の神」だということも知るのです。そのことを証明しているのです。

私たちが持ち得ない愛をもっておられる方、私たちが実践できないそのような愛を実践してくださるお方、それがこの聖書が教える、すべてをお造りになった私たちの神なのです。皆さん、感謝なことだと思いませんか？神はあなたをそのままで愛してくださったのです。あなたの罪を愛していると言っているのではありません。あなたの罪を知った上で、神はそれを赦そうとし、そして、身代わりに主イエス・キリストを送ってくださったのです。これほどのことまでをして、私たちを愛してくださっている方、この神のあの十字架を見る時に「私は愛されている」ということに私たちは確信を持つことができるのです。人が出来るのは「友のために」、「正しい人のために」、また、「情け深い人のために」いのちを捨てることが出来るかもしれません。でも、敵のためには捨てられません。逆らい続ける者のために捨てることはできません。自分のことを憎み続けている者のためにはとても捨てられない。でも、神は違うのです。そのような私たちのためにご自分のいのちを捨てて救いを備えてくださったのです。

この十字架という歴史上の事実は、「私はこの方によって愛されている」ということを私たちに確信さ

せるのです。あの愛が事実だから、あの十字架が事実だから、私たちはこのように確信できるのです。「私たちが神からいただいたこの希望は絶対に失望に終わらない」と。このようなすばらしい神によって救われ、守られ、導かれていることを私たちが感謝しながら生きること、それがどれ程大切なことか、皆さん、お分かりですね！この神が崇められるために、誉め称えられるために、そして、このすばらしい祝福が私たちの愛する者たちに及ぶように願い、祈り、そして、この方を宣べ伝え続けて行くことです。私たちの愛なる神を！